Japan Information-Culture Society

研究論文
research paper

心の境界線——情報化社会のなかで

The boundary of the mind in the information society

信友 建志 Kenji NOBUTOMO
京都大学大学院人間・環境学研究科，日本学術振興会特別研究員
Graduated School of Human-Environment Studies, Kyoto University Research Fellowships for Scientist, Japan Society for the Promotion of Science

要旨

情報技術の大きな進展は，人のコミュニケーションのあり方をも大きく変容させた。その変容によって人間の心にも大きな影響を及ぼすことが懸念されている。本論では，インターネットでのチャットが大きな一要因となった解離性同一性障害の症例を検討しながら，メディアの構造がどのようにどのように患者の症状を構造化していったのかの，一つの可能性を論じる。この症例解釈から推測されるのは，いわゆる仮想現実の肥大が問題なのではなくむしろ象徴的な仮想性の脆弱さが問題であったということである。このために，患者は内面空間を自己の物語と歴史によって構成するのではなく，他者に語られる物語を享受することで構成する，委託的ナルシシズムを基本的な人格構造としていること，そしてその構造にメディアが利用されたという解釈が導かれた。こうした主体の内面性の境界の変容は，今後の学際的な情報文化研究の重要な一ファクターであると考えられる。

Abstract

The development of the information technology transforms the human communication style. This transformation also influences the human mentality. This paper argues the case observation of a dissociative identity disorder patient in which the chat on internet was the one of the significant factor, and points out the one possible interpretation about how the structure of the media structures the patient's symptom. This argument suggests that what is problematic is not the overgrowth of the virtual reality but the fragility of the symbolic virtuality. Because of this fragility this patient cannot constructs her inner space by self-history telling but enjoy being told by the other. The author interprets that this patient's psychic structure is characterized as anaclitic narcissism, which enjoys the story of oneself "being told by the other", and the media was embedded in this psychic structure. This transformation of the boundary of subject's inner space would be the one of the important factor in the interdisciplinary research of the information culturology.

01●はじめに

20世紀は，そのめざましいばかりの技術の発展と，そこからもたらされる大きな文化的変動に彩られた世紀である。しかしそうはいっても，インターネットと携帯電話に代表される情報技術の普及は，やはり最も根底的に文化のあり方を変革したひとつといってよいだろう。それは情報文化と呼ぶにふさわしい一つの文化の創出である。

もちろん，我々は，たとえば「インターネットによって何がどう変わる」などといった過度に単純化された技術決定論に与するつもりはない。だがジンメル[18]の言うように，文化とは，人の心が自分自身に至るために，必ずとることになる回り道であり，その回り道がもつ客観的な性質がそれ自身独自の論理を持っているため，心を無理矢理その枠にはめてしまうものだ，ということも無視できない事実である。ことに，メディアとはまさにその回り道そのものだ。人が文化のなかでの人となるために，この異物を心の基底的な構造に取り込まねばならず，あたかも自明のことのようにそれを第二の自然とすることで，情報文化が成立するのだとしたら，その際に生ずるひずみや影響をもまた多面的に検討する必要があろう。

ある意味ではこうした問題はすでに通俗的なテーマになってさえいる。携帯電話や電子メールが人付き合いを自己中心的なものにしたのではないか，コンピュータはヴァーチャルな情報だけに偏っていて，生きた体験を軽視させないか，あるいはこの奇妙な事件は仮想現実が妄想的に肥大して，現実を浸食していったがゆえに引き起こされたのではないか，等々。もちろん学術的にこうした現状を確認，報告しているものも多々ある。代表的な例を挙げれば，たとえば社会心理学的視点からはタークル[13]が一連の著作で早くから情報化社会における主体のアイデンティティなどの問題に取り組んでいる。我が国でも小此木が一般向けのいくつかの著作[16]で，現状の確認とその分析を，母性的なものの肥大というかたちで示唆している。また，メディア研究の側からも，最近相次いで翻訳の出たシルバーストーン[17]，ロビンズ[19]などがそれぞれウィニコットやビオンらのイギリスの精神分析家を研究に援用している。

こうした動向からも，情報文化の研究はいまやその結実たる諸々の成果の分析の上に，さらにその土壌となるべき人間の心の位置づけを考察していくことの重要性を考える時期にきてい

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

るのではないかと思われる。

ここでは，特にコミュニケーションに関わる諸相，すなわち電子メールや携帯電話といったテレコミュニケーションと，より広いコミュニケーションスペース，つまりインターネットを代表とするネットワーク・コミュニケーションに議論の焦点を絞ることにしよう。そして，ここで上げられた諸要素と密接に関連した具体的な症例を精神分析的な観点から読み直すことで，大きな変革を迎えているコミュニケーションスタイルを特徴とする情報文化のなかを生きる人間の抱えるこころの構造を切り出したいと思う。

本論では，まず第2章で症例を要約して提示し，その概略を把握することを目指す。引き続き，第3章では症例を以下のように整理する。まず，精神分析的な観点からは，一般にヴァーチャリティとよばれているものは3つの区分があるのではないかということを指摘したい。そして，その3つのヴァーチャリティのうち，本症例で特に重要となる想像的，象徴的ヴァーチャリティを，まず概念提示，そして引き続き本症例においてのその概念の意義という順で説明していく。第4章では，第3章での概念分析を受けて，一つの総体的な仮説を提示してみたいと思う。筆者はそれを「内面空間の喪失」と呼びたいと思う。精神的な障害を抱えるものは，多くの場合，よく言われるようにまるで鉱山のカナリアのように，社会変動をいち早く捉え，それにいささか不器用な仕方で適応しようとしているものである。本症例もまた，情報文化の急激な展開に対する一つの不器用な適応の試みとして，この仮説の傍証となりうるものであろうと論じようとおもう。最後に第5章ではこの概念整理と仮説によってもたらされる本稿の意義と展望に触れてまとめとしたい。

02●症例呈示

まず早速に具体的なケースを呈示しよう。以下はドイツの代表的な精神神経学誌であるNervenarztに掲載された症例である[10]。

患者は39歳の女性。幼児期に母親による継続的な身体的虐待，ネグレクトを受けている。12歳のときに養子として他の家族にもらわれていった。その後若干の問題はあったものの，男性との交際が苦手であるという点をのぞけば比較的安定した精神状態をえていた。

しかし28歳の時，彼女は帰路に突然見知らぬ男から襲われ，家に連れ込まれ三日間虐待と強姦を受けた。この事件直後の3ヵ月間に生じた症状は，繰り返されるトラウマの光景の想起，悪夢の中での出来事の再演，男性を直視したり他人に触れたりすることができなくなるなど心的外傷後ストレス障害の病像に相当するものである。また，このころから幻聴を伴うようになったが，それは彼女を不安がらせるのではなく，常に慰撫し鼓舞する支援者ないしは同伴者として，かつ自分のことを幼児期から知っている，自分の一部でもあるものとして体験されている。その声は最終的に48にものぼり，それぞれに名前と人格が割り振られている。

38歳の時，彼女はインターネットのチャットを通じて男性と知り合い，やがて直接の交際を結ぶに至るのだが，そのころから二つの支配的なアイデンティティ「Susi」と「Martin」が彼女の行動をコントロールする発作が頻繁かつ持続的に起こるようになった。それぞれのアイデンティティはネットに「ログイン」して，チャットルームで患者に関する空想に満ちた物語を紡ぎ上げ，それぞれの署名でメールを送るなどした。このことに気づいた男性の勧めもあり，またこの男性自身も，勇敢にも彼女の複数の人格と真正面から向き合って交流していく過程で，精神的な変調を来した(同じく解離性人格障害と診断される)こともあって，その男性に通院に付き添ったついでに彼女自身も精神科の診察を受けた。そこで解離性同一性障害と診断され，外来で支援的な精神療法を続けている。

03●基本的な位置づけ

この症例は，もちろん直接にインターネットやチャットが症状を引き起こしたものではない。これは多くの症例においても同様であり，インターネットに関わらず，メディアが直接的に患者にどのような悪影響を及ぼすのかを，厳密に確定することは難しい。人が想像するようないわゆる「インターネット中毒」のような場合でさえ，むしろ多くの場合は，患者の抱える症状，そしてその人格の基本的構造から生じた諸現象のなかの一エピソードにすぎないことの方が多い。しかし，その症状のなかでメディアがどのように位置づけられ，どのようにその症状の発現のために利用されたか，そしてそのメディアの構造がどのように主体の症状を構造化し，固定化していったか，という分析は可能である。ここから，人の心の基本的なメカニズムにメディアがどのように関わり，そして今後の情報文化社会においてどのようなかたちで人とメディアが調和していく可能性があるのかが示唆されるのではないかと思われる。

特にここでは，ヴァーチャルなものと，ナルシシズムの関連性を中心に論じたいと思う。我々は電子メディアのコミュニケーションスペースでの精神病理というと，やや安易に現実とヴァーチャルなものの混同，ナルシシズムの肥大化といったわかりやすい言葉になびいてしまいがちである。本稿では，ヴァーチャルなものを想像的，象徴的，現実的の三つの意味で把握されるべきものとして整理し直すことで，ナルシシズムのもつ意義とその現代的なあり方の一つの様相を明確にし，そのことで，情報化社会のコミュニケーションスペースと主体との関わりを示したいと思う。

3.1.1 自己像とメディア･･･想像的な仮想性

反省，という言葉がある。英語ではreflection，仏独語でも同様に，語源は反射である。つまり，人が己を省みるというきわめて内面的な行為に，すでに反射鏡というメディアが入り込んでいる。そしてそもそも鏡の中に映る自己像を自己のものとして引き受ける，ということ自身が自然なこととはほど遠い，ということを理解しておかねばならない。ラカン[6]は，三歳児

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

とチンパンジーの知能はそうは変わらないが，チンパンジーは鏡像に一瞬興味を示すものの，それが虚像であると気づいたとたん興味を失うのに対し，人間の子供はそこに自己像を見いだし大喜びをし，それが自己像であるということを両親に確認してもらうべく後ろを振り返る，という。

ラカンはこのことから，鏡像段階という一つのテーゼを提唱した。それは，人はまず鏡像などに映った自己イメージを先行的に取り込み，それに合わせる形で自己を統御しようとするものとされている。

ラカンはさらにこの理論を展開し，フロイトの精神分析的な主体構造論[4]の中に位置づけた。すなわち自我理想と理想自我である。簡単にいえば，理想自我は文字通り理想的な自我，自己の理想的なイメージであり，鏡像段階では鏡像に当たる。自我理想はといえば，そのイメージをよいものであると認め，承認してくれる両親などの第三者の視線に当たるといえる。つまり，「何を演じるか(どの役割を，どんな自己像を)」が理想自我，「誰のために，誰の観点から演じるか」が自我理想である。人間はこうして自分をマリオネットと人形遣いに分割する，といってもいい。自我理想が自分を観察する自分，自分の経験を構造化する自分であるとすると，理想自我は実際に行動する自分の似姿，ということになる。

3.1.2　本症例における想像的仮想性の意義

ここで，症例に戻ってみよう。以上のような見方を踏まえて考えれば，48の人格がいること自体はさして特別なことではない。個々の人格は理想自我として機能し，主体のさまざまな理想像を具現し，呈示してくれている。実際幼児期に，自分の想像上の友達を作り出し，それが現実に存在するのだと主張するという事例はimaginary companionという名でよく知られている。これは必ずしも深刻な障害ではなく，大人になる頃には自然消滅しているケースも多い。我々も多かれ少なかれ，実際に出会った人やその言葉をもとに複数の理想自我を心に併存させているもので，ラカンはそのありようを「モザイク状の自我」と呼んでいたほどである。この患者の場合も，きわめて外傷的な事件に直面し，同様の機制で自己の防衛をはかったのであろうことは，その声がとても支持的で友好的であったということからも容易に伺える。「それは私の人生を守る素晴らしい声よ！」(86)と彼女自身は述べている。

こうした想像的な自己像をただのナルシシズムとしておとしめる必要は何もない。それはもちろんどこにもいない自分，ラカンの言葉を用いれば「先取りされた」自我でしかない，仮想的にシミュレートされた自分である。しかし，ヴァーチャルという言葉の元々の意味通りそれは未だ発現していない「潜勢的な」自己でもあるのである。こうした意味での仮想現実を我々は「想像的仮想性」と呼ぶことにしよう。

したがってここで問題なのは自我理想の方であることは明らかだ。彼女は人生の危機や変動に際し，それを自我理想のもとに一貫した歴史に統合しないままましないまま，とにかくその都度多数の理想自我を並べることで，自我の支えを見いだしていたのである。

インターネットのチャットというシステムは，彼女にとって両義的に機能していたことがここでよくわかる。アカウントの使い分けによって可能性としては常に「それとは別の」自画像を築くことができる。理想自我の無際限，恣意的な増殖というやり方がここでは公認されているという安心感(「彼女にとって重要だったのは，このメディアを通したコミュニケーションによって二人の関係を完璧にコントロールする感じを得ること」(87)であったと症例報告は述べている)に守られ，ついには男性との交際まで可能になった。だが，実際に一人の男性の前に身を晒さねばならなくなると，その安心感，保険は失われ，どれかひとつの自我理想に統一された自画像を演じるという要求が課される。彼女の解離的な症状は，統合ではなく分割統治という以前からのやり方を極端化することでかつての安心感を強引に取り戻そうという試みなのであると解釈される。それゆえ，「ネット上のパートナーとの距離が狭まっていくとともに，この患者の中で内的な緊張が湧き上がり，二つの支配的なアイデンティティ，SusiとMartinが彼女の行動をコントロールする発作が頻繁かつ持続的に起こるようになった。」(87)ものと思われる。

3.2.1　象徴的仮想性の意味

「仮想現実」それ自体はむしろ正常な心のありようの一つということになると，問題は別に探さねばならないだろう。

ここでは，イギリスの精神分析家ビオンのモデル[1]を紹介しておきたい。ビオンは，生の感覚的な印象や情緒経験は，それそのものとしては記憶したり，あるいは思考の材料として用いることは出来ないものではないか，ということを精神病者の治療の経験から観察した。つまり，何らかの形でそれを変形し，加工し，自らの記憶に取り込み，思考の材料とし，経験から学ぶことを可能にした機能が別にあるはずなのである。

ビオンはそれを乳児と母親をモデルに説明する。それは不快をただやみくもに追い出し，追い払おうという乳児の行動に対し，母親がそれを名付け，意味を与え，ケアをするという形で，一方では乳児にも耐えられる形に変形して送り返し，他方では個人的感覚や体験を社会的な意味づけのネットワークのなかに位置づけてやることで，自らのものとして受け入れることができるようにするというものである。つまり，未整理の情報のコード化とフィードバックというシステムが母親によって維持されているのである。ビオンはそうした母の役割を，子供がその意識から獲得した自己感覚のための受け入れ組織であると述べている。

注目されるのは，ヴァーチャルなものの持つステイタスの変化である。こうした「母」による構造化なしには，主体にとっては自らの外での変化も，それを受け取った自らの内部での変化も，同じくらい異他的なものであり，排除されるべき刺激にすぎない。我々は通常，自分のなかにある観念や思考，記憶をヴァーチャルなもの，自らの意志でさまざまに組み合わせ変容させることも出来るものと捉え，現実的なものとしては捉えない。しかし，ビオンによれば精神病者はそれを外部からの光や音の刺激と同じような現実的なものとして把握する，つまり幻覚として再度自らの外にあるものとして知覚するという。奇妙な言い方だがこれは現実的仮想性(厳密には現実化された仮想

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

性というべきだろうが)と呼ぶことができるだろう。本症例では，患者の聞いた幻聴もその一種だ。つまり，我々が先に捉えたような意味での想像的仮想性とは，それを幻覚という現実的仮想性としてではなく，想像的仮想性へと変容させ，経験の中に組み入れることを可能にするための別の力を必要とするものなのである。

ウィニコットは，このような個人的なものとも社会的なものともいえない中間領域を潜在空間と名付けている[14]。この領域が遊ぶことの領域であり，現実を構成する大きなファクターであると位置づけられていることは，ここで決定的に重要な意義をもっている。つまり，我々の社会は見た目ほど現実的であるわけではなく，数多くの象徴的規則という仮想物，ないし虚構によってコード化され，構成されているという認識があるのだ。遊びとは社会的現実とかけ離れたユートピアなのではなく，むしろその現実のあり方のもっとも純粋な部分を抽出したものなのである。ウィニコットが遊びの意義を強調したのはそのためだ。

哲学的文脈では，オースティンの言語行為論を洗練化させたサールの論議[11]のなかに特にこの見解を見ることが出来る。サールはいわゆる現実を，生の事実と制度的事実に区分した。制度的事実とは，ある状況下ではxはyと見なす，という制度的規則が存在し，その状況および規則に則っていると見なされたとき初めて存在する事実のことである。我々の身の回り，特に社会的なステイタスを例にすれば，多くのことが物質的には存在しない仮構を約束事として，制度としてなにか存在するものであるかのように受けとめることから成り立っていることがわかるだろう。特に法に代表されるこうした社会的な現実は，それ自体はベンサム[2]のいうように虚構にすぎない。これを象徴的仮想性と呼ぼう。

こうした象徴的仮想性を受け入れたことで初めて，主体は自らの経験をヴァーチャル化して心の中に保存し，操作し，思考し，そしてたとえば母親など，自分以外の目から見たかたちで整理し直したり，あるいはルールという普遍的な視点からプレイヤーとしての自分を見ることができるようになるのである。これは，象徴的仮想性を受け入れることで，想像的ヴァーチャル化を行うものと見なせよう。ここでは，サールの重視した「見なす」という象徴的な等置を行う能力がもっとも重要である。精神病圏を中心とする精神疾患ではこの等置能力が著しく損なわれ，いっさいの隠喩的ニュアンスが失われ，象徴的なはずのただの概念や言葉が現実的なものそのものとして扱われるようになるということは，シーガルの古典的論文である「象徴等式」[12]に明確に描かれている。

こうした理解を踏まえれば，マクルーハンのメディアはメッセージである，という有名な言葉は，メディアは単なるコンテンツ，想像的なものの媒体なのではなく，そのコンテンツをコンテンツたらしめている視点，枠組み，解釈格子としての象徴的仮想性を送りつけるメッセージでもある，ということと捉えられるだろう。

3.2.2 本症例における象徴的仮想性の意義

こうした観点を受け入れれば，虚構の世界にふけっておらず現実に向き合え，というだけでは何の助けにもならない場合もあることは理解できる。実際，この症例の女性患者の場合でも，あくまでも限定的な意味だが彼女にとってネットのコミュニティに参加するということは，想像的仮想性の構成を意味し，それは現実に向き合うための準備段階としてそれなりに役に立った。彼女は彼女なりに自分の経験を組織化していたのである。問題なのは，彼女の自己像を構造化したメディアのもつ象徴的仮想性の構造が，実際に男性と出会って交際を開始する際に必要な経験構造とは違っていたということなのだ。

彼女の場合，この「見る自分」としての象徴的仮想性が非常に脆弱なため，脆弱化した自我を支えるためには，四六時中自らのイメージをインターネットコミュニティに提供し，それを再認し続けてもらうことが必要になったのであろうと考えられる。インターネットコミュニティであれば，彼女が違うアカウントでログインしてしまえば，それぞれが別人として扱われるために，彼女が何人の自我を用い，そしてそれぞれの自我の(相互に矛盾することもある)物語を語ろうと，さしあたって問題はなかった。しかし，彼女と直接の恋人関係を結んだ男性は，彼女がこれまでネットコミュニティに押しつけていた役割，彼女の経験を構造化する，という任務を不幸なことに一人で背負わされることになった。たとえば「患者は彼らの名前の署名入りＥメールを作成したことを完璧に忘却しており，このメールに対応するファイルのコードから，これらのメッセージは彼女自身のパソコンから送付されていたということが分かっただけであった。」(87)と症例は報告している。この男性の努力は真摯なものであり，例えば「Martin(患者の別人格の一人：引用者注)との話し合いをまさしく，男同士の会話である」(87)ととらえるほどに真剣に受けとめたのだった。この男性が発症したのもまた解離性人格障害であったことは注目に値する。つまり，男性は自分自身をもまた分裂させることで，彼女の分裂したログインに対応しようという必死の努力を行ったと考えられるのである。

04●内面空間の喪失

では，この症例では脆弱であったと想定される，象徴的仮想性の成立を，幼児と言語との関わりを精神分析的な観点から観察した臨床的事実から考えてみよう。

ラカンはこう論じている。幼児は自分の考えていることは両親にすべてお見通しであると信じ込んでいる時期がある。それは，①自分が言語を使って考えている②言語は両親から教えてもらったものである③従って両親が自分の考えていることをすべて知っていて当然である，というある種論理的な推察に基づいている。実際，この観念は神の全知ややましい良心などといった形で姿を変えていつまでも存続している。そして，分裂病圏の症状になれば，自分の思考が周囲すべてに筒抜けである，あるいは誰かに盗まれている，さらには反対に誰かに押しつけられ吹き込まれている，という観念を抱くことはむしろ普遍的である。そして，子供はまず「両親は自分のことを全ては知ら

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

ない」という外傷的な事実を受け入れねばならない。しかし，この両親という最初の他者への信が根付いているのであれば，その視点を自らのうちに「象徴的に」取り込む，つまり象徴的仮想性を成立させることでこの外傷が修復されるのである。

この事実が示しているのは，人間の内面の自由がきわめて危ういバランスの上に成り立っているということだ。本質的には，他者は主体にとって言語というネットワークを介して常時接続かつフルアクセス権をもつものと認識されている，ということが伺えるのだ。内面の自由とは本来きわめて脆弱であり，本来ネットワークとの接続が現実的な条件に制約されるため，「見る自分」という形でそれを内在化し仮想的にエミュレートすることで維持されている，といってもよい。そしてこの症例が物語るのは，この二重化の機構は必ずしも十全に働かないということである。

ラカンによれば，子供がもつ誇大的なナルシシズムは，自己の能力に対してではなく，幼児期における両親の全知全能への確信から来ているという。つまり，自分がその空間のなかに完全に浸り，融合し，守られていれば当然自分も全知全能である，という論理で，肥大したナルシシズムをはぐくむことになるのだと。このような享楽から抜け出す，ということの方がむしろ不思議であり，それは諸々の制約によってやむを得ず課された制約を引き受けたことの帰結なのである。早くからSF小説のコンピュータが「マザー・コンピュータ」と呼ばれていたことは偶然ではない。メディア空間とは我々にとって異質すぎ，そして異質すぎる空間に適合しなければいけないためにストレスがかかり，さまざまなひずみが生じるというのではない。むしろ我々があまりによく知っていた，そして後ろ髪引かれる思いで断念した何かにあまりに類似しているがゆえに，問題なのである。

もちろん，この全知全能とは，実際のインターネット空間の性質を適切に形容しているとは言い難い。しかし，重要なのは知の内実ではなく，形式的特性である。つまり，知の体系と自らの間に諸々の断絶や裂け目が存しない，情報は常に相互的にフルアクセス可能だ，という形式がかつての依存状況を再活性させるのである。この依存状況こそが，他者によって語られることで初めて成り立つ自己の内面，という本症例のような心的構造をもたらしたのだ。

こうして，問題なのは「ヴァーチャルなものの肥大」ではなく「ヴァーチャルであるべきものの現実化」にあることがはっきりしてくる。

4.1 本症例における内面空間の溶解

ウェブ世界が，全世界に公表されるあらゆる些末な私事に満ちた日記や身辺雑記で覆われているというのも，それを考えれば無理からぬところである。ここで流される情報は受け手との直接のやりとりを目的とするというよりは独白に近く，ネットの空間は公共圏というよりは圧倒的に公開された内的空間の体を示しているといえよう。公開される内面性というこのねじれはいったいどう理解すればいいのだろう。

非常に奇妙に思われるかもしれないが，この症例の，別人格によって書かれた自己物語をもとにすると，そこに働いている心的機制は以下のように理解できるように思われてくる。つまり，文字化され(電子テキスト化され)公共に晒されたという時点で，その発信点が自分であったことも忘れて，客観的な知の体系，あるいはそこまでのものといわずとも，少なくとも公共の言説空間の中に自分が書き込まれたという満足を享楽しているのだと。

彼女がネット空間の中に紡ぎ出す物語は，相互に一貫性を欠き，また同一著者名義という最低限の統一性すらもたない。このような状況で，彼女の行為を「自己の経験を物語構造の中に位置づけ，それを自らが語り直すことでアイデンティティを確立する」といったような，ナラティブセラピー的解釈をすることは的はずれであり，あるいはある種の芸術療法のように考えるにも無理がある。彼女はそこに自分とは別個の人間によって「書かれたもの」としての自分の物語を見いだしただけなのである。むしろそれは，一人の男性のまなざしに直面することで，これまでの象徴的同一化が揺らいでしまったのだが，別人によって語られる自分の物語を，その創作の事実を意識することさえなく紡ぎ出すことで，これまでどおりの享楽のモードを維持したまま対処しようとしていたものと思われる。
この享楽のモードは，よく言われるような「電脳空間のなかでのナルシシズムの肥大化」では語り得ない。これは自己の全能感の肥大，現実感覚の喪失といういささか神話的な話ではない。自らが語られるもの，語り続けられるものであるという委託的(anaclitique)なナルシシズムのかたちをとっているのだ，と考える方がより本質的に問題の構造を浮き彫りにするだろうと思われる。

主体の内面の空間が失われ，外部のネットワークのなかにその内面性を委ね，溶かしきってしまうこと，それは我々の人間観からあまりにかけ離れていないだろうか，そう疑問を感じて当然である。しかし，これはすでに現在進行形の事態として展開しているという状況もないだろうか。なにも電子社会化によって権力による監視社会が完成するなどという，権力側だけの責任を問うべき問題ではない。他方で我々自身が，すべてが他者によって記録され，見守られ，つながっているという安心感に浸りたいと願っているのではないか。たとえばマイクロソフト社の開発中のMyLifeBits[1]。このプロジェクトの現在の推定では，平均的な1人の人間の人生に関する情報は約1TB。ここにメール，ウェブログ，読んだ本，写真，聞いた音楽を収めるらしい。さらに家電製品，携帯電話などがコンピュータを中心にネットワーク化され，その情報がメインにおかれたPCに自動的に同期・記録されるようになれば，1TBではとても足りないであろう容量のなかに，より包括的な情報が盛り込めることになるだろう。

この状況は突然のものではなく，すでにテレビ時代にその萌芽を見ている。例えば，テレビは世界の窓ではなく，ますます受信者自身の窓，その内的な葛藤や生活の困難さを映し出す窓となったとエレンベール[3]はいう。彼が論じているのはフランスでは心理ショーpsy-showと呼ばれる番組で，応募してきた一般視聴者が自分の秘すべき内面の心情や本来他人に知られる

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

ことが恥であったり苦痛であったりする経験を赤裸々に晒す，というスタイルが大人気を博した。彼はこの種の番組の流行とドラッグの消費量の顕著な関連性をも立証している。ショーと薬物，ここに共通するのは，内面という重荷は自己が担う必要はない，という態度だ。いまやそれは，他者が知っている，語ってくれるものであるべきか，あるいは薬物的に操作されるべきものなのだ。

そして，この傾向はウェブという主体的な発信手段を獲得することで，逆説的にも拡大傾向にあるように思われる。ネット上でのメッセージの発信は，情報の送受信という明確な目的のためでもなく，他人とのコミュニケーションそれ自体の喜びのためになされているのでさえない。知の体系のなかにそれが書き込まれたことで，自分が「語られるもの」となったことを享楽することが目的なのだ。最終的な意味ではどこにも能動者のいないこの状況は，ジジェク[15]の論じる相互受動性と重なるものがある。この相互受動性のためにために，主体のなかに積み上げられ，同時に主体自身のアイデンティティをも構成していくはずの歴史=物語が，メディアによって語られ，与えられ，主体のアイデンティティの核，心の諸構造の結び目は主体の外側に置かれるものでなくてはならないようしむけられているのである。

05●おわりに

もちろん，技術はそれだけで人の全ての振る舞いを決定するわけではない。新しい技術とは人の心にとっては，それがどれほど夢の実現に近いものと思われても，やはり常に異物の侵入である。そして，本症例に見てきたように，人は自らの心的構造のさまざまなコンポーネントをその技術を取り込み，それを前提条件とするような形で組み替え直す。そのことで，いつしか技術という異物は人間にとっての自然な条件となる。このことを本症例はよく示してくれている。

本稿の意義は，こうした観点を精神分析的な心的構造論からとりだしたことにある。これは近年脚光を浴びているレジス・ドゥブレを中心とするメディオローグ達が提唱する「人工補綴prothèse」という概念とも共通する立場であり，学際的な研究の基盤として豊かな可能性を持つものと思われる。かつまた，そこに実際の症例というややミクロなレベルでもその裏付けを与え，具体性を示すことができたと思う。

さらに，本稿の利点は，ラカン，ビオンという，極めて構造的な心的装置論を論じていった著者を理論を活用して症例の分析にあたったことにある。もちろん，冒頭に上げたようにシルバーストーン，ロビンズらもビオン他の理論を適用しようという試みはみられるが，フロイト以降の精神分析の心的構造論の中の総体的な見通しをやや欠くために，現象レベルでのいささか心許なげな対比にとどまっている観がある。本稿では十分な長さをとって，特にヴァーチャリティという概念を3つの区分で慎重に分析した。その結果，精神分析の心的構造論が本来持つ，非常に組み替え度の高い柔軟な構造が生かさ，メディア論において精神分析を，単に応用的，補足的なかたちでだけではなく，構造的な共通性から適用する可能性を開いたと言っていいと思われる。

とはいえ，もちろん筆者は，本症例のようなたったひとつの症状が今後のすべての傾向を説明すると言いたいわけではない。

例えば活版印刷が，その後長らく写本を模していたように，人ははじめのうちは，新しい技術にもできるだけ古い技術をモデルにして対応しようとするものだ。例えば，マクルーハン[8]をはじめとする多くの論者は，電子情報化社会をリアルタイム性，主体の現前性，および共同体形成の促進を特徴とする声の文化の回帰と予想した。実際，本症例から導きだされた帰結，主体の内面空間の外在化について，ハヴロック[5]が古代ギリシアのテキストから導いた仮説を重ねてみることもできるだろう。ハヴロックによれば，古代ギリシアでは詩人たちによって形成された集団が，各成員の記憶や判断の枠組みを構成するのであり，各成員はミメーシスによって，その詩に感情を同化することで記憶や判断，感情などを受け取っていたとされている。ラカンも，感情は個人の最も私的なものであるどころか，他者から受け取る「法的評決」のようなところがあると述べている。

だが，このようなコミュニティ主義の成立が我々の未来の文化の姿ともまた言えないだろう。本症例に見られるのは，むしろ電子メディアの中に文字の文化の特徴，つまり孤独にテキストに向かい合う，内面化された匿名の主体という特徴を，判断枠組みの外在化，という声の文化に属する一つの特質で上書きしたような奇妙な折衷形式のように思われる。したがって，この先の情報文化の進展のなかで，このスタイルがコミュニケーションのあり方の典型例になるとは，もちろん言い切ることはできない。情報の速度が加速度的に上昇したといっても，人の適応速度にはかぎりがある。それを考えれば，この状態が，華やかな飾り文字と装飾で写本を模していた誕生直後の活版印刷本のような，過渡期の一現象である可能性もある。また，書物に関してもごく最近まで「イメージの氾濫」と，それを制御するために自分自身を閉じた空間の中に閉じこめてしまいがちだ，など，どこか似たような批判があったことも押さえておくべきだろう。

とはいえ，この状況は，ラカン派の分析家ミレールが示唆している[9]ように，精神分析においても，分析家の解釈が患者の言葉の意味作用を追っていき，解釈し，そのその謎を解決することで機能するのではなく，患者の言葉を身体の満足の特定のモードとして理解してやることで機能するものに変化しつつある，という，精神分析を取り巻く状況の変化に呼応しているようにも思われる。筆者が本症例を特にとりあげて分析したのは，こうした分析家達の報告する，現場レベルでの傾向の変化を，もっとも象徴的に表現することのできる症例の一つではないかと思われたからである。

同時にまた，情報社会学で重要なトピックである監視社会論にも，同じ問題意識が共有されていることを指摘しておきたい。ライアン[7]は，旧来の規律型テクノロジーには反省性や自己意識，良心という観念が必要だったのに対し，リスク，監視，セ

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

キュリティで構成される情報化社会のあらたな体制は，そうしたものを必要としなくなるかもしれないと述べている。このように，本稿は精神疾患の臨床の現場からはメディアがなんの意味をもつのかを理論的に整理した形で位置づけ，同時に情報社会学の側からは，メディアの変動やそこから生まれた社会変動に主体がどう適応していくか，という問題をいちづけるための第一歩である。今後のさらなる学際的研究によって，そうした状況を具体的なかたちで補強しつつ検討するための価値を持つこともあるのではないかと思われる。

最後に本症例の女性の予後を紹介して，新たな可能性の萌芽を提示しておこう。彼女は現在恋人に付き添うために病院の近所にホテルを借りたという。インターネットの使用時間は控えたらという医者のアドバイスは無視を決め込んで，友人ともカウンセラーともネットでコミュニケーションを取っているという。しかし，それは今度はそれは「家を飛び出そうとしている」ことなのだと彼女はいう。

彼女が本当に「家から飛び出し」新たな世界へと自分を開いていくことができるのか，それはまだ定かではない。しかし，心に傷を抱え，さしあたっての適応でそれとなく人生をやり過ごしていた女性に，インターネット上のコミュニケーションというこの情報文化の申し子は，はじめに多くのトラブルを引き起こし，ついで家から飛び出すという生まれ直しの契機を与えてくれたことは確かである。実際，恋人を看護するという，ネット空間とは異種の要素が一つ人生に加わるだけで，彼女にとってネット空間は真の意味でのコミュニティースペースに変容しうるのかもしれないのだ。こうした異種の要素をより自由に結びあわせるもの，来るべき情報文化のあり方をそこに見出すことも可能ではないだろうか，ということを示唆して本稿を結びたいと思う。

（注）
*1
http://research.microsoft.com/research/barc/MediaPresence/MyLifeBits.aspx

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

信友 建志●のぶとも・けんじ
京都大学大学院人間・環境学研究科。
専門は思想史，精神分析学。共著書に『言語臨床事例集第六巻』(学苑社・近刊)。訳書にローラン・ディスポ著『テロル機械』(現代思潮新社)。

著者略歴

参考文献

[1] Bion, W. R : Second Thoughts, MARESFIELD LIBRARY, London, (1967)
[2] Bentham, J : A Fragment on Ontology in The Works of Jeremy Bentham Vol.8, ed. John Bowring, Russell&Russell.Inc., New York, 1962
[3] Ehrenberg, A : L'individu incertain, Calmann-Levy, Paris, (1995)
[4] Freud, S : Group Psychology and Analyse of the Ego, The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, vol.18, Hogarth Press, London, pp.69-146, (1955)
[5] Havelock, E. A : Preface to Plato, Oxford, B. Blackwell, (1963)
[6] Lacan, J : Èrits, Seuil, Paris, (1966)
[7] Lyon, D : Surveillance society, Open University Press, Buckingham, (2001)
[8] McLuhan, M : Understanding media : the extensions of man, London, Routledge and Kegan Paul, (1964)
[9] Miller,J.A : Paradigms of Jouissance, trans. Jorge Jauregui, Lacanian Ink no.17, pp.8-47, (2000)
[10] K.Podoll, D.Morth, H. Sass, H.Rudolf:Selbsthilfe im Internet, Nervenarzt, Band 73, Heft 1, Januar, pp.85-89, (2002)
[11] Searle, J. R : Speech Acts:An Essay in the Philosophy of Language, Cambridge University Press, (1969)
[12] Segal, H : Notes on symbol formation, International Journal of Psycho-Analysis, 38, 391-397, (1957)
[13] Turkle, S : Life on the screen : identity in the age of the Internet, New York, Simon & Schuster, (1995)
[14] Winnicott, D. W : Playing and reality, Tavistock Publications, London, (1971)
[15] Žizek,S:The plague of fantasies, Verso, New York, (1997)
[16] 小此木啓吾 メディアエイジの精神分析, 東京, 日科技連出版社, (1996)
[17] シルバーストーン,ロジャー:なぜメディア研究か：経験・テクスト・他者, 吉見俊哉, 伊藤守, 土橋臣吾訳, 東京, せりか書房, (2003)
[18] ジンメル, ゲオルグ：文化の哲学, 円子修平, 大久保健治訳, 東京, 白水社, (1976)
[19] ロビンス, ケヴィン：サイバー・メディア・スタディーズ：映像社会の「事件」を読む, 田畑暁生訳,東京, フィルムアート社, (2003)

NII-Electronic Library Service